

民族藝術学会

第 37 回大会案内

会 期： 2021 年 4 月 17 日(土)、18 日(日)

主 催： 民族藝術学会

会 場： オンライン開催（当番校：中京大学）

テーマ： 周縁化された“art/”の未来 —芸術学と人類学の接近—

プログラム：

第 1 日目 4 月 17 日（土）

14:00	開会挨拶	
14:05~17:00	シンポジウム「プリミティヴィズム」再考	
14:05~14:25	基調報告	吉田憲司（民族学）
14:25~14:55	報告 1 「プリミティヴィズム」の現在 —美術史学の方法論をめぐって	大久保恭子（美術史）
14:55~15:05	休憩（10分）	
15:05~15:35	報告 2 サリー・プライス再考 —「プリミティヴ・アート」の表象をめぐって	柳沢史明（芸術学）
15:35~16:05	報告 3 21 世紀のプリミティヴアート： 日本における展示・販売と生活の場からの一考察	緒方しらべ（文化人類学）
16:05~16:15	休憩（10分）	
16:15~16:35	コメント	大村敬一（文化人類学）
16:35~17:00	討議	
17:00~17:15	休憩（15分）	
17:15~17:45	総会	
17:45~18:00	第 18 回木村重信民族藝術学会賞授賞式	

第2日目 4月18日(日)

10:00~12:35	一般発表	
10:00~10:35	スペイン・メセレイエスの仮面衣装検討	吉村宥希(文化人類学)
10:40~11:15	先住民美術における風景表現の真正性： クインシー・タホマのモニュメント・パレー	中山龍一(美術)
11:20~11:55	想像力の蝶番 —D・グレーバーにおける対抗的な想像力について—	江上賢一郎(美術)
12:00~12:35	読めない文字を織り込む： 台湾セデック族の布装飾の視覚言語化をめぐる	田本はる菜(民族学)
12:35~13:30	休憩(55分)	
13:30~15:25	一般発表	
13:30~14:05	日本に伝来する二種類の「油滴天目」をめぐる	小林 仁(陶磁)
14:10~14:45	琉球舞踊古典女踊り「柳」と昆劇『牡丹亭』の 動作比較による一考察	小西潤子(音楽) 樋口美和子(舞踊)
14:50~15:25	刹那の楽しさ—隠岐民謡の現在	佐々木 悠(民族学)
15:25~15:40	休憩(15分)	
15:40~17:35	一般発表	
15:40~16:15	明治・大正の建築界における「東洋芸術」 —伊東忠太の活動を中心に—	モハッサミプール・ザヘラ (比較文学比較文化)
16:20~16:55	バルトークの《ピアノ・ソナタ》第3楽章における変奏手法 ～残された民俗音楽的要素とそうでないものをめぐって～	木村優希(音楽)
17:00~17:35	南アジアの太鼓文化 —タブラーとジョーリーにみる奏法と太鼓ことばの関係	井上春緒(音楽)
17:35~	閉会の挨拶	
18:00~	オンライン懇親会	

■シンポジウム 「プリミティヴィズム」再考

4月17日(土) 午後 14:05~17:00

14:05~14:25 基調報告

吉田憲司(民族学)

プリミティヴィズムが主題化され、大きな議論をとなった巻き起こす契機となった、1984年、ニューヨークの近代美術館(MoMA)で開催された展覧会「20世紀美術におけるプリミティヴィズム—モダンなるものと部族的なるものとの親縁性」から、37年。半世紀と四半世紀のちょうど中間の時を経た今、芸術の世界でも、また日々の生活の世界でも、果たして私たちは、自らと異なる者を「他者化」という強い力学をはらんだプリミティヴィズムを克服し、より広い世界の認識に到達しえているのだろうか。

異文化と関わる営みがプリミティヴィズムを胚胎するか否かの基準は、その営みが対象を「未開」視し、「文明」の側にたつ自身とは異なる「他者」として措定する機制をはらんでいるか否かの一点につきる。

多様性と普遍性に関する問題系を共有する中で、芸術学と人類学との接近が顕著にみられるようになった今日、美術の研究の中で、人類学の営みの中で、そして私たちの生活世界の中で、今一度、私たちがプリミティヴィズムを克服しえたかどうか、いまだ克服しえていないとすれば、今後どのような試みが求められるのかを、芸術学・美術史学と人類学の領域を超えた議論の中で、改めて探りたい。

それは、新型コロナウイルス感染症の広がりのもとで、さまざまな分断が顕在化する中、そうした分断を芸術と文化の研究に持ち込まない手立てを探る試みでもある。

14:25~14:55 報告1 「プリミティヴィズム」の現在—美術史学の方法論をめぐって

大久保恭子(美術史)

モダニズムの枠組で開催された MoMA での「プリミティヴィズム」展での美術史学と人類学との論戦ののち、ポストモダン/ポストコロニアル時代を通して美術史学は対象を地球上全地域の造形活動へ拡張し、隣接諸領域の発想を取り込む「ニューアートヒストリー」が生じた。それを踏まえて世紀の転換点に美術史学はイメージ人類学として西欧中心主義から脱しイメージ全般に適用できる方法論の模索を行う。その一人ディディ=ユベルマンは美術史の任務を、イメージの力の本質を根源的に重層決定され領域侵犯的なものとして理解することとし、複数の歴史の可能性を模索してアナクロニズムを可能にするプリミティヴィズムにおいて起源と近代性との錯綜を論じた。2018年の「ピカソとプリミティブ」展ではイメージ人類学の発想に通じる展示が見られる。21世紀の美術史学は「世界美術史」を模索するが、そこにおいて「普遍」の問題は更なる検討を必要としている。

15:05～15:35 報告2 サリー・プライス再考——「プリミティブ・アート」の表象をめぐって
柳沢史明（芸術学）

一九八〇年代後半における芸術と人類学との交点を代表する書、S・プライスの『文明の地における未開芸術』は、研究者・コレクター・愛好家らの言葉やメディアにおける表象、ミュージアムでの展示等の分析を介して西洋における「プリミティブ」なもの、とりわけ「プリミティブ・アート」に対する傾向を詳らかにした。A・ジェルが示した人類学における芸術研究の方向性とは異なっていたものの、一般大衆の想像力に働きかけるような「プリミティブ」なものへの様々な幻想とそれに対する批評的精神が展開されたこの書は、今なお黒い木彫に付与される「呪い」のイメージが拭い去れない現代日本において再考される余地がある。

15:35～16:05 報告3 21世紀のプリミティブアート：日本における展示・販売と生活の場からの一考察
緒方しらべ（文化人類学）

本報告は、21世紀現在のプリミティブアートを、20世紀のプリミティヴィズムとも、また、1980年代半ば以降のプリミティヴィズム批判とも異なる観点から捉える試みである。現在でも、プリミティブアートは欧米を中心に展示され、売買されている。それらが作られ、使われてきた社会で暮らしている人びとの営みをいつまでも変わらない「伝統」や「未開」とするような見方、あるいは、プリミティブな美のみに価値を見出す西洋中心主義的まなざしを批判する見方とは別の見方をすると、何が見えてくるだろうか。本報告では、日本国内の美術館、博物館、企業におけるプリミティブアートの展示・販売の現場の実践を事例に、プリミティブアートを生活の場と結びつけて考察することによって、プリミティヴィズムの再考を試みる。

16:15～16:35 コメント
大村敬一（文化人類学）

16:35～17:00 討議

■一般発表 4月18日(日)午前

10:00~10:35 スペイン・メセレイェスの仮面衣装検討
吉村宥希(文化人類学)

スペインのカスティーリャ・イ・レオン州メセレイェスの村では、伝統的なカーニヴァルがおこなわれているとされる。その場に登場する仮面衣装の多くは、素材となったモノの名で呼ばれる一方、職業名や「大頭」など人間の属性を表す言葉で呼称されるものもある。

先行するヨーロッパ仮面研究では、仮面は「死と再生」と関連づけられ、冬を終わらせ春の訪れを告げる来訪神と解釈されてきた。しかしながらメセレイェスの仮面衣装の場合、その素材となったモノないし属性が行為主体となっているが、これらは果たして来訪神なのだろうか。もとより、スペインを中心とするヨーロッパ南部の仮面文化に関する知見は未だに乏しい。

本発表の目的は、メセレイェスの仮面衣装の素材、仮面衣装が表象する属性に関する人々の語りの分析から、仮面衣装の使用目的を明らかにするとともに、「ヨーロッパの仮面文化」におけるメセレイェスの事例の立ち位置を明確にすることである。

10:40~11:15 先住民美術における風景表現の真正性：クインシー・タホマのモニュメント・バレー
中山龍一(美術)

アメリカ合衆国南西部の先住民ナバホの画家、クインシー・タホマ(1920-56)は、1930年代にニューメキシコ州の先住民の寄宿学校、サンタ・フェ・インディアン学校(Santa Fe Indian School)で、背景を省略して儀礼や動植物を描いた先住民による絵画、いわゆるインディアン画を制作するようになった。タホマは1940年代に、インディアン画の画家としては例外的な、ナバホ居留地内の具体的な場所—西部劇の舞台として有名になるモニュメント・バレー—の風景を作品に取り入れた。本発表は、政治学者グレン・クルサードによる、入植者植民国家(settler-colonial state)における、先住民に対する「承認の政治(politics of recognition)」の批判的分析を用いて、入植者植民国家における風景の表象が持つ問題を考察する。20世紀前半の先住民画家にとって、先住民居留地という空間は、映画等のメディアを通じて表象され、非先住民の観者の想像力の枠組みに取り入れられてはじめて、表象可能なものであった。

11:20~11:55 想像力の蝶番—D・グレーバーにおける対抗的な想像力について—
江上賢一郎(美術)

本発表では、昨年急逝したデヴィッド・グレーバー(David Graeber)の概念、芸術と政治を同時に思考する場としての「想像力」に注目する。これまでグレーバーは、文化人類学を軸に、アナキズム、社会運動、政治経済を再接続する議論を展開してきたが、そこにはさまざまな生や社会の可能性を思い描く人間の「想像力」と、それを抑圧する暴力のシステム(国家、資本主義、官僚組織等)との対抗性という視座が通底していた。グレーバーが直接的に芸術論を論じる機会は多くなかったが、芸術と社会運動を、共に「想像力」の表象、あるいは現実化の方法論として捉え直すことで、両者が「ありうべき世界」を想像する力に由来していると指摘している。発表では、グレーバーの論考「ジャイアントパペットの現象学」、「前衛主義のたそがれ」、「後ろ向き革命」から、未完のプロジェクトとなった「もうひとつのアート・ワールド(Another Art World)」を参照しつつ、芸術を生産の一形式として捉え直し、従来の前衛主義的な芸術観から脱しつつ、世界や他者を「ケアする」想像力の社会的な拡張を通じて、グレーバーが思考した芸術と政治の新たな回路について再考する。

12:00～12:35 読めない文字を織り込む：台湾セデック族の布装飾の視覚言語化をめぐって
田本はる菜（民族学）

台湾原住民族の織物は、今日までかれらの代表的な物質文化として知られてきた。中部山地に多く暮らすセデックのあいだでは、慣習的に機織りが女性の仕事とみなされ、社会規範と密接に関連してきたことはよく知られている。しかし、1960年代から80年代にかけて従来と異なるスタイルの布が登場したことは、これまで目立った注目を集めてこなかった。セデックの布に多く見られる幾何学模様を中心としたデザインとは異なり、具象的な絵柄、国民党の政治スローガンなどが織り込まれたそれらの布は、かれらの布の社会的性格の変化について考える一つの手がかりとなる。本発表では、この新たな装飾が文字のように「読む」ことのできる性格をもつことに注目し、この変化をデザイン上の問題にとどまらない、植民地化と近代化を通じたローカルな装飾経験の変容に関わるものとして提示する。

■一般発表 4月18日(日)午後

13:30~14:05 日本に伝来する二種類の「油滴天目」をめぐって
小林 仁(陶磁)

日本には中国産の天目(茶碗)の優品が数多く伝世している。なかでも国宝の曜変天目と油滴天目はその代表である。大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の国宝の油滴天目は南宋時代の建窯のものと考えられるが、日本にはこうした建窯産の油滴天目以外に、いわゆる「北方油滴」とも呼ばれる金時代の華北産の油滴天目も少なからず伝世している。南北異なる地域でつくられたこれら二種類の「油滴天目」は、実際には胎土や油滴の斑文の形状などに大きな違いが見られる。さらに、後者には歴史上「曜変天目」とも認識されてきたものも含まれる。本発表ではこの二種類の「油滴天目」の相違と伝来の背景などについて考察しながら、日本におけるそれぞれの位置づけを明らかにしたい。

14:10~14:45 琉球舞踊古典女踊り「柳」と昆劇『牡丹亭』の動作比較による一考察
小西潤子(音楽)樋口美和子(舞踊)

琉球舞踊古典女踊り「柳」(以下「柳」)は、柳、牡丹、梅の3つの採り物を持ち替えて舞う。「柳は緑／花は紅／人はただ情け／梅は匂ひ」という、《柳節》本歌は、他の演目のような恋歌ではなく、禪と共に日本本土に広まった蘇軾(1036-1101)の句「柳緑花紅真面目」に、「梅は匂ひ」「人には情け」が加わったものとされる。さらに、特徴的な動作を伴うことから、「柳」は特異な演目とされてきた。発表者は、3つの採り物が湯頭祖(1550-1616)の戯曲『牡丹亭還魂記』を象徴する点に注目する。これは、美女・杜麗娘が牡丹亭の裏庭に出て、夢の中で主人公の青年・柳夢梅と出会い、梅花観という道堂で再会する物語であり、1822年には琉球進行使節が清朝皇帝と共に観劇している。本発表では、「柳」に特徴的な動作について、『牡丹亭』のストーリー展開および杜麗娘の動きと照合することで、その伝承に新たな解釈を加えることを試みる。

14:50~15:25 剎那の楽しさー隠岐民謡の現在
佐々木 悠(民族学)

本発表では、島根県隠岐島の民謡に関する人類学的調査を踏まえ、「伝統」概念に着目し、変容する民謡の性格の共時的断面を提示する。

隠岐民謡は内外の言説により「伝統芸能」と表象される。先行研究において、「伝統」は過去との構築された連続性、規範の反復、制度的な規定といった特徴を持つとされる。しかし隠岐民謡はこうした要素を完全には含まない。規範を定める楽譜は、聞き覚えを習わしとする語りを通じて彼らの実践とは差異化される。また、規範への忠実さを要求する大会で即興が行われ、観客を楽しませる。民謡は住民の語りにおいて「昔から酒の席で楽しんでやってきた」と表され、本来連続性と対立する一時的な「楽しさ」が、過去との連続性として言明される。こうした住民の語りの背景には、過疎化による民謡の担い手の減少がある。現在の隠岐民謡は、実践の楽しさを維持するため、様式の固定化を胚胎する伝統の表象をまとう、両義的状况にある。

15:40～16:15 明治・大正の建築界における「東洋芸術」——伊東忠太の活動を中心に
モハッサミプール・ザヘラ（比較文学比較文化）

本発表は、明治・大正期の建築界における「東洋芸術」の概念が何を意味し、どのような背景のもとで使用されるようになったのかを探求するものである。近代日本においては、日中の絵画と彫刻を中心とした「東洋美術」という独自の概念が形成されたが、主に建築界で使用された「東洋芸術」はそれとは異なる概念である。本発表では、伊東忠太（1867-1954）をはじめとした建築家たちが20世紀初頭に行った活動に着目し、「東洋芸術」の地理的範囲とジャンルについて検討する。具体的に扱うのは、工科大学建築学科展覧会（1905～1914年）、『東洋芸術資料』（日本美術社、1909～1911年）、『文様集成』（建築学会、1911～1916年）である。こうした展覧会活動や出版を実証的にたどりながら考察することにより、「東洋芸術」においては、「東洋美術」と比べて「東洋」の地理的範囲および「芸術」の字義に含まれるジャンルが広く捉えられたことを浮き彫りにしたい。

16:20～16:55 バルトークの《ピアノ・ソナタ》第3楽章における変奏手法
～残された民俗音楽的要素とそうでないものをめぐって～
木村優希（音楽）

バルトーク・ベラ BARTÓK Béla（1881-1945年）は、20世紀ハンガリーの音楽家である。彼の唯一の《ピアノ・ソナタ》は、第3楽章の冒頭主題をはじめとし、母国ハンガリーやその周辺地域の民俗音楽的要素を含む主題が多用されながら、従来の楽曲形式としての「ピアノ・ソナタ」にもあるような、旋律や主題の構造的な扱いも同時に見られる作品となっている。終楽章である第3楽章は、8小節の冒頭主題が楽曲中で繰り返し登場する際、多様な変奏を施されながら展開していくという特徴を持っている。本発表では、この楽章の作曲過程が見られる自筆資料（スケッチ、第一草稿、第二草稿）と現行の出版譜を対象とし、バルトークがそれらの変奏を推敲していった過程を分析することで、どのような民俗音楽的要素がどの段階で生み出され、残され、変容していったのかということについて、「逸脱の音」、「装飾音を伴う変奏」、「旋律の細分化」という観点から考察することを目的とする。

17:00～17:35 南アジアの太鼓文化—タブラーとジョーリーにみる奏法と太鼓ことばの関係
井上春緒（音楽）

本発表では、南アジアの太鼓文化と太鼓ことばの関係について研究結果を報告する。南アジアには、さまざまな芸能や儀礼が息づいており、それぞれが固有の文脈のなかで伝承されてきた。その中でもインドでは、太鼓の文化が発達しており、民族芸能や儀礼で叩かれる太鼓から、古典音楽で演奏される太鼓までさまざまな種類の太鼓が存在している。これらの太鼓には、それぞれ独自の太鼓ことばが発達している。発表者が長年研究対象としてきた古典音楽の太鼓タブラーやさらに歴史が古いジョーリーでは、太鼓ことばは「ボール」とよばれ、太鼓を演奏する上でもっとも重要な要素と考えられてきた。太鼓ことばと楽器の奏法はどのような対応関係にあるのか、あるいは太鼓ことばには宗教的意味などが盛り込まれているのか、太鼓文化と太鼓ことばの関係を紐解くことで、口頭伝承を基本とするインドの芸能の実態を明らかにしたい。